



# 精神障害者から見た人々

Vol.10

広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

東京都テレビ制作者 小倉 朗さん(42歳)

2001(平成13)年3月。厚生労働省精神保健福祉課のKさんより「日本テレビでやっている政府公報『さわやか日本』という番組で国立精神・神経センターの竹島先生と対談していただきたい。収録日は22日の午後です」という電話を受けた。22日の午後は予定が入っていたので「その日の夜でしたら」と私は答えた。

Kさんは「それではテレビ局の方から連絡するようにしますので」と言った。そして番組制作会社の小倉さんから電話が入り「広田さんにお会いしてお話を」と言われた。「そうですね。では私が医療ミスの注射をうたれて、その副作用のために緊急入院した精神科病院をみてほしい。その不幸な体験が私の発言や活動の原点です」と私は言った。

その時の小倉さんの返事が「ノー」だったら

私はテレビ番組出演を断っていた。しかし小倉さんは「病院を案内してくださいませんか！ぜひ伺いたい！」と言った。そこで何日かお互いの都合がいい日を選んで、病院の院長に電話を入れた。

院長は「前に広田さんがラジオ出演した時にラジオ局の人が来たけれど、あの時と同じ程度の説明でいいの？」と言った。「ええ。あの時のように病棟を見てもいい、そして、今、〇〇病院が抱えている精神科救急等の課題についていろいろお話ししてください。テレビ局の人に対する啓発にもなりますので」と私は言った。約束の日、小倉さんが六ツ川交番に来た時、「ここが電話でお話ししていた待ち合わせ場所なんですな」と言ったので、「そうなのよ。多くの相談者がここへ来て、私は本当にこの交番の歴代のお巡りさんにお世話になっているのよ」と答えた。小倉さんは「いい話ですね」と言った。そしてタクシーに乗った。

〇〇病院の院長室で説明を聞いて、私が入院

したA3病棟へ。小倉さんは一生懸命、院長に質問し、もう一度院長室へ戻って、再び説明を聞き、私の活動場所へ立ち寄ってから、我が家へ来た。そこで「ああ、広田さんに会ってよかった。本当に勉強になりました」と言った。この言葉を聞いて「小倉さん！あなたの作る番組にできる気持ちになりました」と私は言った。

小倉ディレクターは「そうですね。それでは早速ですが、テレビの画として、六ツ川交番とこの家は、はずせません」と言われたので、私は神奈川県南警察署の親しい課長に、小倉さんの言葉を伝えると折り返し電話が入った。

課長は「政府公報番組に六ツ川交番が映ることを署長が了解しました」と手短かに言った。小倉さんは、その日、5時間ぐらい一緒にいたが、しみじみと「実は最初にこの番組のことを厚労省に話した時、Kさんは『精神障害者の美術展』を推薦されたのですが、私は、何か言いたい人を紹介してくださいと依頼しました」と言った。当時の厚労省精神保健福祉課には、広報番組に美術展を主張するKさんと、精神障害者のスポーツ大会を主張するNさんが同室内にいた。「きちんと言いたい人の代表で出るのであれば、いい編集にしてくださいね」と私が言うと、小倉さんは「もちろんです。収録前にアナウンサーにも〇〇病院を見せたい」と答えた。わずかな数分の私の番組出演の中で、私が活動をしている中で感じていて、多くの人々に話していた課題が盛り込まれたこの番組のビデオを私は今でも大学での講演などで使っている。

## ひろたかずこ

かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。

インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。

現在も毎日11錠の向精神薬をのまないで眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。

長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

